

# 新田農村の社会構造と農民生活

——滋賀県安土町大中部落の点描——

川 口 幸 穂

## 第一節 大中部落の成立

### 一、大中部拓地の概観

大中の湖干拓地は滋賀県の琵琶湖の湖東に位置し、国鉄安土駅からほぼ4kmの位置にある。この地区が干拓される前は内湖であり、ほぼ水進三メートルの盆状をしていた。地区総面積は一、三〇〇haであり周辺延長は一二五kmである。

この干拓事業は、昭和二一年に緊急食糧増産計画に基づき昭和二五年、自作農創設維持を目的にして開始された。着工は昭和三二年で総工費三二億円が投資された。土地の配分は昭和三八年第二回入植営農部会が開かれ農産物並びに営農資材価格の動向、生活程度の向上等を推察し、当初土地整備、営農等に相当苦勞が予想されるが、四ha程度が最良であると

決定された。将来の農業の拡大も考慮され四haのうち一haは集落周辺の高位置に、三haは集落周辺の中央部にまとめられる配分となった。

土地配分が決定し、ほぼ干拓地の様相が整った昭和四〇年六月、滋賀県公報第五〇六号「琵琶湖干拓大中の湖の土地配分計画」の公示が行なわれた。公示記載の農家数は入植者二一六戸、増反者二七戸が募集された。干拓地および入植者が決定されるといよいよ集落が建設されることになった。集落の位置は過去の水害の経験から住宅および畜舎等の農業施設においても必要な盛土を行ない安全面を重視した。

生活および営農上の便利を計るために南部、北部、西部の三集落に分けられた後、近代的な農業経営のために生産流通部門の乾燥貯蔵施設を中心とし、三集落を一体化するため農

業センターを中核部に置くことにした。

現在入植者二二六戸、増反者一二三戸の計三三九戸である。大中の湖干拓地には区画整理された住宅地と、はるかに続く耕地、近代的な農業施設が完備され近代的な新農村の様相を示している。

この干拓地には北部集落（行政的には能登川町に属する）、西部集落（近江八幡市所属）南部集落（安土町所属）の三つがあるが、本稿では南部集落（安土町大字大中）についての概観をおこなうものである。

## 二、大中集落入植者の出自

回収アンケート用紙三一通によって南部集落世帯主の出自をみると、県内出身者二六名県外出身者四名、不明一名となる。

県内出身者でもっとも多かったのは安土町一四名、次いで志賀町三名、朽木村二名、あとは近江町、西浅井町、米原町、高島郡出身者各一名である。県内出身者全体で言えることは安土町出身者一四名（五四％）を除いて、他は県内の各地から集合してきているのである。一方県外出身者の出自は兵庫県、東京都、海外移住者各一名である。（残りの一名は不明）

つぎに南部集落に婚入している人びとの出自をみると以下

のようになる。県内出自者二二名中、安土町八名、能登川町四名、近江八幡市三名、あとは八日市市、彦根市、永源寺町、土山町、湖北町、豊郷町、木の本町、各一名である。また県外出自者一四名中、岐阜県出身者五名（大垣市三名、美山町二名）、長野県出身者四名（その内下佃郡上村一名、松川町大島一人）あとは京都市中京区、新潟県十日町市樽沢、三重県四日市市、兵庫県多賀郡中町、熊本県出身者各一名である。

一般に滋賀県出身者は米作やハウス野菜等の経験は豊富であり、このことは干拓地農業経営にとって基礎的に重要である。これに対し長野県出身の人々は肉牛の肥育に詳しく、この点で南部集落における肉牛についてのリーダーシップをとっていることが注目される。長野県出身者は肉牛の経営でも固く結びついており、集落内での団結も強固である。

## 三、集落の社会構造

### （一）世帯数と人口構成

南部集落の世帯数は現在五八戸である。集落の協業体構成は八戸から成り九協業体すなわち七二戸が本来の姿である。しかし一四世帯が南部集落に居住しておらず、安土もしくは、その周辺の移住前の住居で生活している。この南部集落で生活していない人々については、「生活の問題」で後述す

表1 年齢別世帯員数

年 齢	性 別	人 数
0～15 (歳)	男	35
	女	35
16～19	〃	11
	〃	12
20～24	〃	15
	〃	9
25～29	〃	15
	〃	9
30～34	〃	3
	〃	5
35～39	〃	5
	〃	5
40～44	〃	10
	〃	14
45～49	〃	16
	〃	13
50～54	〃	11
	〃	12
55～59	〃	7
	〃	6
60～64	〃	7
	〃	4
65～69	〃	4
	〃	6
70～	〃	5
	〃	7
計	男女	144 137

(注) 「農林業センサス」  
1980年による。

と南部集落の全人口は、二八一人である。その内基幹労働力となる男子の労働人口は、全人口の三五・二%、さらに補助労働力となる女性の労働人口は、三一・六%である。女性が、すべて農作業を手伝うわけではない。しかし大中の湖農協南部婦人部長から聞いた

「女性労働力なしでは南部集落の営農は成り立たない。」という言葉からしても、大部分の女性が労働人口として機能していることは明らかである。

これからしてみると、男性、女性労働力人口は全人口の六六・八%にも達し、三ちゃん農業と言われる現代農村社会における農家にくらべて、高度の就労状態を示している。すなわち南部集落の労働人口の負荷率は、四八・七%である。

(計算方法は、Bを分母、A+Cを分子とする。)

## (二) 家族構成

南部集落の家族構成は、表2のようになる。人数別家族構成でもっとも多いのは、五人家族で全世帯の三二%を占め、次いで多いのは四人家族で二八%である。四人から六人家族が全世帯の八〇%を占めている。平均して一世帯当りの人員は四・九三人となる。

表2 人数別家族構成

人 数 別	家 族 数	家族員数	家 族 数 率 比
1人家族	0	0	
2 〃	1	2	1.4
3 〃	6	18	8.5
4 〃	20	80	28.2
5 〃	23	115	32.4
6 〃	14	84	19.7
7 〃	5	35	7.0
8 〃	2	16	2.8
計	71	350	100.0

(注) ①アンケートの際の家族票による。  
但しこの集落に居住していない14戸  
(1戸を省き)については、後日の  
聴取調査によった。

ることに  
する。  
人口構  
成である  
が、まず  
青少年人  
口の年齢  
帯を、〇  
歳～一五  
歳までと  
し、これ  
をAとす

る。  
次に労働人口の年齢帯を、一六～六五歳まで、Bとす  
る。老齢人口の年齢帯を六六歳以上、Cとする。表1による

このアンケート調査（五七年七月）と五五年の国勢調査と比較することには若干の無理があるが、全国では一世帯当り人員が三・二二人、滋賀県では三・六五人、安土町では四・〇二人であり、この集落の一世帯当り人員が多いことを示している。大規模農家であることを示す。

(注) 1980年「農林業センサス」による(センサスの際には、集落外居住の14戸を除く58戸がその対象とされた。以下同じ)

族 (extended family) と拡大家族 (Ly) に二分すると、七

一世帯中三八世帯が核家族で、平均一世帯当り人員は四・二一人である。これに對して三三世帯が拡大家族であり、平均一世帯当り

人員は五・七八人である。大家族において世帯主との続柄をみると、世帯主の両親または片親と同居している世帯が二〇世帯・世帯主の両親および世帯主の子供の家族（三世帯同居）が三世帯、世帯主の子供の家族と同居が一三世帯である。

拡大家族が多いのは、農村社会の一般的な特徴であるが、南部集落においても農業労働力として拡大家族の機能が働いている。

このことを農業就業者別農家数でみると、男子就業者を二人以上もつ世帯が五〇％いることがわかる。(表3) 南部集落における拡大家族が、農業労働力として重要な機能を果たしていると思われる。

### (三) 集落の諸組織

昭和四十一年の入植当初、各協業体は八戸ずつ九つの協業体に分けられ現在に到る。

南部集落の協業体は、第一九から第二七協業体に配置された。

協業体を編成するうえで特に配慮された事は以下の四条件であった。（大中の湖干拓史二二七頁より引用。）

(一)人間関係(気のあった者同志)特に地元居住者の場合に配慮され、協業の基本的条件となった。

(二)ある程度経営主の年齢に変化をつける。これは、高齢

表4 協業形態別、集落別協業体数

	昭和41年			昭和42年			昭和43年			昭和44年		
	北部 集落	西部 〃	南部 〃	北部 〃	西部 〃	南部 〃	北部 〃	西部 〃	南部 〃	北部 〃	西部 〃	南部 〃
協業経営 協業体単位 〃一部 個別経営	9 — —	5 — 4	4 1 4	9 — —	9 — —	3 4 2	5 4 —	2 2 5	2 1 6	— 5 4	— 2 7	— 3 6

(注) 今西芳三「干拓地における共同化の一考察について——大中の湖の事例研究——」(普及月報第21巻, 1970年6月号。滋賀県農業改良課)による。

者、若年者層が、固まらないように年齢層を平均化するためである。

(三) (米+畜産) 経営志向農家あるいは(米+園芸) 経営志向農家を集めることによって、協業の機能を高める。

滋賀県内居住者は、一般に米作経験は十分だが畜産、野菜の経験者が少なかったため、当初大中の湖で何をすべきかわからず、そのために、できるだけ同一志向の農家を集め一諸にすることで、増産を計ろうとした。

(四) 再入植者は、できるだけ集める。再入植者は過去に失敗の経験をしており、開拓に対する心構えが他者に比べて強固で

あるため、一諸にすることで、さらに団結心が強くなるであろうとの配慮であった。

以上四つが協業体編成のための大きな条件であった。

南部集落の特色は、入植者の出自でも述べたことがあるが、様々な地方からの寄合所帯であることである。

出身地別でみると、安土町三三戸(四五・八%) 県内三一戸(四三・一%) 県外八戸(一一・一%) である。

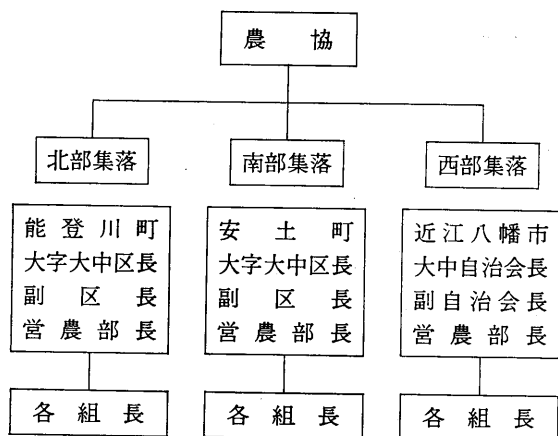
比較の意味で、北部、西部の出身地を見ると、北部集落は能登川町七二戸(うち栗見新田四七戸) 西部集落は近江八幡市五〇戸(六九・四%) 県内二五(二〇・八%) 県外七戸(九・七%) である。このことは営農に対しても直接影響しており、入植当初西・北部落が全面協業体制をとったのに対して、南部集落では農機具の利用だけ、あるいは、当初から戸別経営をとる農家があった。(表4)

入植の年と翌々年の昭和四三年には北部集落が、半数の協業体制を残したが、昭和四四年には、三集落のすべては協業経営を中止している。

次に集落の自治組織であるが、協業体が八戸ずつ九つの組織を現在も続け、各協業体に協業長一人が輪番制で選ばれ、その上に営農部長、副区長、区長が置かれている。

区長は、集落全員の選挙で選ばれる。さらに一三名の協議員(区長、副区長、営農部長、婦人部長および九協業長) 制

図1 集落の構造図



(注) 1. 副区長 (副自治会長) は会計事務を兼ねている。

2. 組長は従来の協業体の代表者である。

[注] 大中の湖干拓史より引用

度があり区長の招集によって月一回程度集まっている。  
以上が南部集落の集落組織の構造であるが、これを三集落  
および農協組織でみると図1のようになる。

他に南部集落内の協力団体には、大中の湖農協南部婦人部  
(六五名)、大中の湖南部経営者OB会(一八名)、大中青年  
会(三二名) 大中の湖南部老人クラブ(三二名) などがある。  
現在南部集落において、協業経営の方針はなく、個別経営

の方に進んでいる。

## 第二節 集落の生活とその諸問題

### 一、集落自治の展開

昭和五二年度から五七年度に到る自治の展開を述べるものである。頁数が限られているため、すべての問題を列挙できないので、前年度から続けて重要な問題となっているもの、および、その年次に新しく提案された問題を取り上げた。  
(区長所にある自治会記録による。)

### 昭和五二年度

- (一) 仮公民館の処分問題
- (二) 環境整備(集落内での排水路の掃除及び草刈り)
- (三) 墓地推進協議会
- (四) 教養誤楽、趣味の集い

この中で特に(三)が問題となる。大中に入植者として住んでいない者は、氏子として認めずとの意見が出たが、これに対し、氏子として年中行事に参加してもらうことで、氏子と認めることになった。もう一つは(四)で、集落内での宗教行事等を活発化するようにとの意見が出た。

## 昭和五三年度

- (一) 教養誤案、趣味の集い
- (二) 墓地、水道の問題
- (三) 環境問題会議（排水路の完備）
- (四) 南部遺跡保存の草刈りと清掃
- (五) 自警団の編成替

昨年に続き(一)が討議となる。入植一三年目にあたり、従来の良き農村の伝統行事を取り入れて大中地蔵を建立し、地蔵盆を行ない、青少年教育の一助にしたいとの発言が取り上げられ、恒例の行事とした。

## 昭和五四年度

- (一) 新農村構造改善問題の推進
- (二) 南部遺跡文化財保護への協力
- (三) 墓地問題の推進
- (四) 町税納税完納問題
- (五) 集落農業者の健康管理、集団検診
- (六) 広域水道の問題

## 昭和五五年度

- (一) 新農村構造改善問題の推進

- (一) 農業者健康管理の推進
- (二) 南部遺跡文化財保護への協力
- (三) 長野地方集団研修旅行
- (四) 墓地問題の推進

## 昭和五六年度

- (一) 新農村構造改善問題の推進
- (二) 農業者健康管理の推進
- (三) 南部遺跡文化財保護への協力
- (四) 織田信長四百年祭への協力
- (五) 墓地問題の推進

山岡栄市、浜岡政好編『広域生活圏と地域づくり』（法律文化社）九四頁に、安土町における織田信長四百年祭への協力が詳しく述べられている様に、四は集落あげての協力であった。同九八頁に「本町で最もユニークなまちづくりの目玉は『地域博物館』をふまえた歴史的文化のまちの建設にあるといつてよい。全町をもって文化の屋根とし、また国民休養圏の中核となることが本町の未来構想であるように思える。」と述べられている。

以上でも理解できるように、集落は安土町の方針に積極的に協力している。

## 昭和五七年度

(一) 新農村構造改善問題の推進(集落内道路整備工事、ハ  
ウス建設)

(二) 農業者健康管理の推進

(三) 南部遺跡文化財保護への協力

(四) 墓地問題の推進

(五) 新生活運動の推進

(五)の問題は冠婚葬祭の簡素化を婦人部が申し入れたもので、極力、見舞等の餞別などを無くそうとする運動であり、集落内での対人関係に伴なう煩雑さを軽減しようとしたものである。

## 二、集落の年中行事

南部集落の年中行事を月別に述べることにする。

二月二十九日「祈念祭」五穀豊饒の記念祭であり、特に米が豊作であることを願ひ、集落すべての人が集まり、大中神社で、この祭を行なうものである。

五月二十七日「鎮座祭」大中神社の御神体を伊勢神宮から勧請してきたことを祝う祭である。

六月三〇日「大御祓」一月一日から無事に半年間生活してこられた事に感謝し、後半年を安全に生活できることを願う

## 儀式。

八月二三日「地藏盆」子供の健康や生活の安全を祈る祭である。南部集落には地藏は建立されていなかったが昭和五三年に青少年の教育の一助として大中地藏が建立された。この日公民館の前に矢倉を立て、盆踊や夜店が開かれ南部集落の人々の全体の祭である。

九月一五日「運動会」敬老会も兼ね、「ムラ」の親睦をはかる。

十一月二三日「ニイナメ祭」新米のとれたことに対する新穀感謝祭。

十二月三十一日「大御祓」七月一日から十二月三十一日までの無事安全を感謝する日。

この他に「ムラ仕事」として七、八、九月の日に集落内の草刈り、溝掃除を美化運動としてする。そして毎年一〇月に、南部集落より進歩していると思われる農協の視察を兼ねた研修会旅行がされる。昭和五六年には三重県の農協、翌五七年は、明石農協に軟弱野菜の栽培を見学。昔の農村の様に協同で肥料や苗を仕入れたり、ムラ全員で協同の仕事をするようなことはない。やはり新農村として「ムラ」がつくられ、「ムラ」としての歴史が浅いためであろう。しかし、村の行事を積極的に催し、集落の人々全員が参加していることによって、南部集落としての独自の歴史が形作られていくこ



とだろう。

### 三、氏神の勧請と家の宗教

大中の湖の南部集落の氏神は、昭和五十一年に伊勢神宮の社殿から移されてきた天照大神である。氏神としての御利益は五穀豊饒である。新しい集落の成立に当って氏神を勧請することは、やはり日本のムラの特徴と考えられる。

氏神の創建において中心人物となつたのは堀幹夫氏である。堀氏は前区長でもあり、老人会のリーダーの一人でもある。彼は東京の大東塾という右翼団体の人物と懇意であり、その人の助力により大中の湖の新農村の氏神として天照大神を氏神として勧請した。

氏神の運営は、主に老人会のメンバーが主体となり、宮総代が毎年選ばれる。選出は年功の順で輪番制である。運営は南部集落の住民全体が主体となるのが建前であるが、もっぱら老人会の全体協議により、年々の催し、行事等が決定される。

天照大神が集落の氏神となっているが、村民は県内の各地、および県外から移住してきたので、その宗教的な宗派は家々によってそれぞれ異なる。

県外出身者の宗教を調べてみると、「神道」が一人（飯田市出身で平家の落人を自称）、他に臨済宗と曹洞宗があり、

これらは長野県出身者で占められている。

県内出身者の宗教および師匠寺は以下の様になり、師匠寺は入植者の出身地と密接な関係があるので、住所も記すことにする。

永昌寺—天台宗	甲賀郡水口町字川一〇五〇
正伝寺—曹洞宗	高島郡新旭町三八
称名寺—浄土宗	東浅井郡湖北町海老江三五七
福成寺—浄土真宗	犬上郡多賀町大字敏満寺二六五
光泉寺—浄土真宗大谷派	坂田郡伊吹村吉槻八八
法福寺—浄土真宗	蒲生郡安土町常楽寺六三九
永順寺—浄土真宗	大津市中央一ノ二ノ三二
正法寺—曹洞宗	高島郡安曇川町常盤木一二九八

このように家によって宗派が異なるため、部落の氏神を勧請し祭ることに、かなりの反発が各家からでた。つまり個人の宗教、家の宗教、地域の宗教の問題が生じたのである。話の合いの結果、各家としての氏神としてではなく、地域神—南部集落を代表する氏神として祭ることに協議が一致した。また移住前の住居から田畑だけを耕やしに来る人を氏子として認めないという意見が協議会から出たが、氏神の年中行事に積極的に参加することで氏子として認めることに決着した。

氏神が祭られ、しばらくした後、隣の小中地区より氏子として百戸が加入し、地域全体としての氏神となりつつある。

最後に葬儀と墓地の問題を述べることにする。五一年当初、大中神社の境内は、墓地となる予定であった。しかし、宗派の異なる墓地に埋葬されることに、各家からの大反対があり墓地とはならなかった。

滋賀県は、両墓制をとる場合が多い。両墓制とは、村の中に死者の霊を拝むための墓をもうけ、遺体は、忌むべきものとして、村の外の墓地に埋葬するのである。宗派としては、天台宗、浄土宗が両墓制をとる。南部集落において埋葬の方法は、県内出身者は各家の師匠寺で土葬にされ、県外出身者は近江八幡の火葬場で火葬となる。

葬儀の時、中心となるのは協業体八戸である。形骸化した協業体ではあるが、冠婚葬祭の時は大きな機能を果たすことを示している。

#### 四、生活環境の問題点

生活環境で一番多かったのは、牛糞尿の悪臭の問題であった。肉牛を肥育している農家が多いので、どうしても牛舎からの悪臭が、住宅地位まで流れこむのである。調査の折もこの問題について苦情を言う農家が多くあり、集落内での問題となっている。

牛糞尿の処理施設は完備されているのだが、牛舎からの悪臭が時おり風向で、住宅地まで流れるらしい。

糞尿処理施設がさらに完備されることが南部集落住民の希望である。

次いで生活の問題で「集落内での人間関係に気を使う。」と答えたアンケートが四通ある。冠婚葬祭の簡素化が、五七年度の総会で決議されたところからみて、近隣の人間関係に、かなり気を配っていることが窺える。

その内二通が、地元（安土）から田畑だけを耕しにきている人々との人間関係がうまくいかず集落内での行事に参加、協力しないとの意見であった。

集落内の七二戸の内、一四戸が空屋もしくは他人に賃貸している。

田畑だけを耕やしている人に、この件をたずねると、「自分の家は捨てがたい。」との答であった。

三番目に「医療の不便」を訴えたのが二通ある。南部集落の近くには病院がなく、病人がでた場合、車で近江八幡の市民病院まで連れていくとのことであり、南部集落の近所に医療設備の完備が望まれる。

また風雨の強い時に「児童の通学に不便」と答えたのが一通。国鉄安土駅の近所に小学校があるが、片道はほぼ4kmもあるので風雨の時は不便であらう。

他に「農業経営の方針において他の農家と対立する。」と答えたのが一通と、「時代遅れの風習に対して現代に合った生活改善」、「墓地がない。」とのアンケート解答が各一通あった。

生活の問題に関して、「別になし。」が五通、無回答一〇通であった。

全般に言えることは、悪臭の問題と医療施設が完備されていない事以外は、近代的農村として、ほぼ充実した環境と言える。

### 第三節 「ムラ」の諸組織とその活動

#### 一、大中青年会

大中青年会は、大中湖農業青年部の下部組織である。年齢資格は、一六歳から結婚するまでという条件で三二人のメンバーから構成されている。これに対し大中の湖農業青年部は結婚した二五歳位から三〇歳前後の人々で占められている。

青年会のメンバーの就業状態をみると、養豚一人、肉牛五人、酪農一人で他はハウスや露路野菜や米作を中心としている。

集落内の彼らの主なる役割は自警団、消防団を組織し、南部集落内の安全面を守ることである。他に地蔵盆、ニイナメ祭等の準備を手伝う。青年会は「ムラ」の生活や行事には積

極的に参加するが営農全般に対しては発言はしない。

これからの営農の方針は、メンバー一人当り〇・五haから一haの広い耕地をうけもっており、大型農業機具を利用することで生産効率を上げることが目指している。そして後継者問題においては、子々孫まで大中の湖の耕地を継がしていくことである。

#### 二、大中の湖農協南部婦人部

南部婦人部は農協組織の一部である。婦人部は、西、北、南部の三つの支部に分かれている。結婚すると資格ができ、メンバーは六五人である。南部集落内での主体となる役割は農協保健所の健康管理の手伝いである。年に一回の健康診断の時に集落の人々の血圧、尿検査等の手伝いをする。

また集落内の活動として、お茶、お花、書道、踊方教室、着物の着つけ、民謡、詩吟、琴などを公民館で月一回もしくは週一回行ない、一年に一回秋に研修旅行に出かける。

南部集落の補助労働力となる女性の労働人口は三一・六%にもなる。これからしても、営農における女性の補助労働力としての役割は大きい。この問題に対して南部婦人部長は「夫婦で営農しないと成り立たず、補助ではなく主体である。」と述べた。特に水稲、野菜における補植、苗植においては欠かせぬ重要な役割を果たしている。

南部集落内において、主婦は、長男、長女が結婚すると同時に仕事を譲り渡す。平均は五五、六歳である。この集落の婦人の労働人口としての期間は、比較的長いのではないかとと思われる。

婦人部の公的活動としては、滋賀県「家の光」(農協雑誌)に寄稿し、滋賀県農協連絡協議会の一単位として活動している。

### 三、老人会

老人会は六〇人のメンバーから構成されている。会員に加わらない人が三人。

各家庭で老人だけが農作業に従事しているのが三軒で、いずれも肉牛を肥育しており、頭数は一五頭である。老人会全体で、農作業はしていない。

老人は、若い世代が農作業に出かけた後の孫のお守、家事手伝いなどと、忙がしく、老人抜きでは家庭が成り立たないものが多数出る。

また家事手伝いだけではなく、農作業全般に手を借している元気な老人も多数おり、農繁期には貴重な労働力となっている。

これからみても、都市部に見られる形だけの集まりといった老人会ではなく、新農村の営農に対する発言力も強い。機

能集団の面から見ると、老人会の地位は高く、地域社会にうまく適応している。

老人会のリーダーの茶野氏に、今後の老人会の運営の方針をうかがうと「自主的・進歩的に老人会を運営していくのが目標」と答えた。

新農村の営農および後継者問題に関しては老人会で話し合うことが度々あり、直接には干渉しないが、着実に継承されていくことを期待している。

現在の老人会は、墓地問題のほかにスポーツを通じての健康増進である。ゲートボールを主体とした軽い運動で、朝五時半に起きて老人会のメンバーで試合をし、老人相互の親睦と健康の増進をはかっている。

(大学院博士課程)